

近代日本社会思想史

Ⅱ

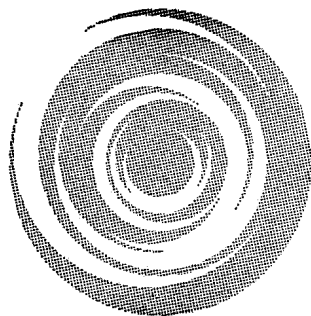
編 集

古 田 光
作 田 啓 一
生 松 敬 三

監 修

宮沢俊義 大河内一男

近代日本思想史大系 (2)



有 斐 閣

監修者紹介

みや ざわ とし よし
宮 沢 俊 義 (元東京大学名誉教授)

おお こう ち かず お
大 河 内 一 男 (元東京大学名誉教授)



編者紹介

ふる た ひかる
古 田 光 (横浜国立大学教授)

さく た けい いち
作 田 啓 一 (京都大学教授)

いき まつ けい ぞう
生 松 敬 三 (中央大学教授)



近代日本社会思想史 II

近代日本思想史大系第2巻

昭和46年7月25日 初版第1刷発行

昭和54年8月10日 初版第2刷発行

¥ 3,800.

編 者 古 田 光
作 田 啓 一
生 松 敬 三

発 行 者 え ぐさ ただ あつ
江 草 忠 允

東京都千代田区神田神保町 2-17

発 行 所 株式会社 有 斐 閣

電 話 東 京 (264) 1311 (大代表)

郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番

本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前

京都支店 [606] 左京区北白川追分町 1

©1971, 古田光・作田啓一・生松敬三.

Printed in Japan

印刷・株式会社精興社 製本・高陽堂

落丁・乱丁本はお取替いたします。

1330 - 070721 - 8611

まえがき

ここ数年来、明治維新以来今日にいたるまでの、近代日本の歴史を、あらためてふりかえり、私たちの今日の位置をたしかめようとする関心が高まってきている。そのことは必ずしも、今年がたまたま維新から数えて百年目に当たっているからといった、たんに偶然的な事情によるだけのことではあるまい。私たち日本人がそのなかにおかれている内外の社会的な状況の急激な変動そのものが、あらためて私たちに対して、私たち日本人のおかれている歴史的な位置や方向についての根本的な再検討をうながしてきているからである、と思われる。

この『近代日本思想史大系』（全八巻）は、以上のような問題意識のもとに、近代日本百年の歩みを、とくに思想の次元から、多角的に、また総合的にとらえ直し、そのことを通して私たちが今日直面している思想的な状況のもと歴史的な位置や課題を明らかにするとともに、未来にむかっの進路をさぐる手がかりを提供することを願って、企画されたものである。そしてこの「社会思想史」は、政治思想史、経済思想史、法思想史などとともに、この『大系』の一環をなすものとして企画され、編集されたものにはかならない。ところで、「社会思想」とか「社会思想史」という言葉は、これまできわめて多義的に用いられているので、私たち編集に当たったものが、どのような意図のもとに、どのような視角から、本書の構成に当たったか、という点について簡単に述べておきたい。

私たちは、本書を編むに当たって、「社会思想」という言葉を、広い意味にとり、社会生活の全体とのかかわ

りにおける思想のあり方を示す言葉としてとらえることにした。すなわち、それを、政治思想、経済思想、法思想、等々とならんで、社会生活のある特定の領域にかかわる思想を示す言葉としてではなく、むしろそれらを全体として包括し、統合する意味をもった言葉としてとらえることにした。そうすることによって、本書を、この『大系』全体に対する一つの概観的な見取図、あるいは基礎的な前提といった意味をもつ書物たらしめたい、と考えたのである。しかし、社会生活の諸領域にかかわる諸思想の多様な動きを、どのような視点から包括的・統合的に把握しうるか、また把握すべきかということは、必ずしもすではっきりした答えの出ている問題ではない。むしろ、具体的な個々の動きの考察を通して、最後に再検討さるべき性質の問題であろう。しかしまた、ある程度の仮説的構想なくしては、諸事実の断片的な考察とその羅列に終わるほかないことも明らかである。ここでは、そのような弊を避けるために、社会観・人間観の基本的な構造の究明というところに重点を置いて、近代日本における諸思想の多様な動きを考察するとともに、それを通して近代日本における社会思想の構造的な特質とその内包する問題点を析出してみよう、と考えたのである。

このことは、本書の構成および叙述をつらぬく基本的な目標であり、視点であるが、こうした意図を達成するために、本書においては、とくに次のような諸点に留意し、その究明のために若干の工夫を試みてみた。思想の動きは、その現実的な基盤となり条件となっている、社会そのものの動きと無関係に生じてくるものではない。本書では、近代日本における社会思想の多様な動きを、日本における近代社会の形成・発展・変容の過程との連関において、その諸段階に即して、考察してみようと考えた。このような観点から、本書では、社会の歴史的な展開の過程に対応する思想の歴史的な展開の過程を六つの段階（「近代思想」の生成、民権論とナショナリズム、明治社会の思想構造、大正デモクラシーの統合と分極、日本型ファシズムの擡頭と抵抗、戦後日本の思想的課題）に区分し、さ

らにその各段階の叙述を次のような二つの部分に大別することを試みてみた。すなわち、各段階における社会思想の全体としての動きを展望し、その連関構造や特質に照明を当てようとする『概観』の部分（各部の第Ⅰ章）と、そこに内包されているいくつかの重要な問題点を取りあげ、いっそう立ち入った究明をおこなおうとする、いわば『各論』の部分（各部の第Ⅱ章以下）とに、大別することを試みてみたのである。

その場合、さらに『概観』の部分においては、その考察を通して、社会そのものの歴史的な変化と思想の変化との動的な連関構造のあり方をさぐり、これのできるだけ鮮明にえがきだすことに重点をおき、後者の『各論』の部分的な連関構造においては、従来の研究成果をふまえつつ、現代的な視点からこれに新たな照明を与えるというところに力を注ごうとした。また、具体的な内容に関していえば、とくにつぎのような諸点を念頭におき、その究明をめざそうとした。(1)日本における社会と思想の近代化の過程を、世界的な近代化の過程との連関においてとらえ、その構造と特質をさぐる。その場合、たんに西欧との関係ばかりではなく、とくにこれまで不十分であった、アジアとの関係の解明にも力を注ぐこと。(2)日本においては、外来の思想と土着の思想、知識人の思想と庶民の思想、近代的な思想と伝統的な思想とのあいだに、特殊な結合と反撥の関係が生じてきている。これは従来も問題として論議されてきた点であるが、歴史的な再検討を通して、問題点の所在とその克服の方向をさぐる。こと。(3)このように社会と思想の近代化の過程を「日本」という特殊な条件との連関において考察するとともに、そのような考察を通して社会と思想の「近代化」そのものが内包する普遍的・原理的な問題点（たとえば、個人・共同体・国家・社会の原理的な関係をどうとらえるべきかとか、科学とイデオロギー、自然と人為などの関係をどうとらえるべきかといった諸問題）をも再検討し、思想展開の新たな可能性をさぐる。以上のような諸点である。

私たちは日本人として、歴史的に形成された日本の社会と文化のなかに生きている。思想の発展方向というも

のは、必ずしも与えられた歴史的・社会的な条件によって、あらかじめ一義的に決定されているものではないであろう。しかし、与えられた特殊な歴史的・社会的な条件とそこに内包されている問題点——私たち日本人にとって切実な、不可避的な問題点——との自覚的・主体的な対決なしには、根本的な意味において、いかなる創造的發展も不可能であるということもまた、たしかであろう。私たちは、本書における歴史的な考察を通して、近代日本における思想の創造的發展の伝統をさぐり、その確立に寄与したいと念願したのである。こうした念願がどの程度に実現されているかは、読者の判定にゆだねるほかはないが、私たちの試みが、読者自身の思索を展開していくための、一つの手がかりともなれば幸いである。

一九六八年一〇月

第Ⅱ巻の刊行にあたって

本書第Ⅰ巻の刊行は一九六八年一月であった。それから二年半の歳月を経て、ようやく第Ⅱ巻を刊行するはこびとなった。私たちはこの時期、大学闘争の渦中にあり、また海外出張などで忙殺されたとはいえ、予定より刊行が大幅に遅れたことを、早くから原稿を寄せられた執筆者ならびに読者に対して、お詫び申し上げたい。また章の構成と執筆者については、諸般の事情により企画発表のときと異なったところもある。多忙の中を新たに執筆に参加願った方々には、とくに厚く感謝の意を表したい。執筆者各位の御協力によって私たちの試みもほぼ達成されたように思われるからである。なお巻末に「社会思想史年表」を付した。読者の便になれば幸いである。

一九七一年五月

目次

まえがき

i

第4部 大正デモクラシーの統合と分極

1

I 大正デモクラシーの統合と分極

小山仁示

3

1 民本主義と教養主義

3

大正デモクラシーの先駆(3)

国権への抵抗と民衆との

結合(4) 小ブル自由主義思想(6) 民本主義の提唱

(9) 黎明会の思想(11) 教養主義の性格(13)

「事実の思想化」の意味(15) 上求菩提と下化衆生(17)

社会運動観・労働運動観(18)

2 マルクス主義の擡頭

21

個人と社会(21) 小さき旗上げ(23) 「デモクラシー」

への対応(25) デモクラシー批判の不毛性(28) マル

クス主義の旗印(30) アナ・ボル対立(32) 日本マル

クス主義の創出へ(34)

II 中国革命・ロシア革命への思想的対応

野沢 豊 39

目

1 大正デモクラシーの国際環境

39

帝国主義日本・半殖民地中国・社会主義ロシア(39) 大

正デモクラシーと中国革命との同時代的波動(40) 中国

革命とロシア革命の性格の相違(41) 国際連帯か愛国排

外か(42)

2 大正デモクラシーと統一戦線

43

陳独秀の「日本政局論」(43) コミュニズムとナショナ

リズムへの対応の仕方(45) 統一戦線の問題(47)

3 大正デモクラシー期の対外運動と対外認識

49

第二次護憲運動と対外関係(49) 排日移民法をめぐる反

米風潮(50) 対米依存と対華侵略(51) 日中ソ提携論

(53) 日本の対華政策への危惧(55) 「東亜連盟」(56)

孫文の北上(58) 「大アジア主義」(59) 中国動乱の

背景(60) 日本の対華政策と右翼の動き(61) 中国問

題への新たな視点(62)

4 大正デモクラシーと「満蒙問題」

64

満蒙問題の重要性(64) 田中外交への批判(66) 民族

的危機感と対華侵略思想の強化(68)

III 日本思想史における〈修養〉思想 宮川 透 71

——清沢満之の「精神主義」を中心に——

1 はじめに 71

2 〈修養〉思想擡頭の背景 73

日本人の人間形成と〈修養〉思想(73) 国民道德運動と
〈修養〉思想(73)

3 清沢満之における〈修養〉思想 77

清沢満之の生涯(78) 清沢における〈回心〉の構造(84)
清沢における〈修養〉思想(86)

IV 転形期の反逆 荒川 幾男 89

——木下 李太郎と北一輝——

1 転形期としての一九一〇年代 89

木下李太郎と「パンの会」(89) 「中国革命同盟会」と
北一輝(92)

2 「ヨーロッパ主義」と「社会主義」 93

李太郎と「ヨーロッパ文化」(93) 北一輝と「社会主
義」(96) 「パンの略取」と「パンの会」(98) 自律
的知識人の生成(99) 「時代閉塞の現状」(100)

3 「反逆」の二潮流 102

ヨーロッパ文化の根元に遡る道(102) 超国家主義革命へ

第5部 日本型ファシズムの擡頭と抵抗

109

I 日本型ファシズムの擡頭と抵抗

土方和雄

111

1 思想史における〈昭和〉期——条件の転換

111

天皇制国家の危機(111)

関東大震災の歴史的意味(113)

文化環境の決定的変様(114)

2 マルクス主義の昂揚とプロレタリア文化運動

118

A 昭和前期マルクス主義の意義

118

日本思想史におけるマルクス主義(118)

〈一九三〇年代

と日本(119)

B 〈福本イズム〉の登場

121

解党後の政治状況(121)

〈福本イズム〉の理論内容(122)

〈福本イズム〉の歴史的意義(124)

C 「二七年テーゼ」から「三二年テーゼ」へ

126

「二七年テーゼ」の理論内容(126)

〈労農派〉の登場と三

一年テーゼ草案(127)

「三二年テーゼ」の理論内容(129)

D 日本資本主義論争の思想的意義

131

『日本資本主義発達史講座』の刊行(131)

日本思想史に

おける資本主義論争(133)

「三二年テーゼ」以後の運動

展開と敗退(136)

3 日本型ファシズムの擡頭と支配

A 日本型ファシズムの思想的特質

ファシズム・イデオロギーの一般的性格(140)

ファシズムの特殊性(142) そのイデオロギー的特徴(144)

B 日本型ファシズムの展開過程

日本型ファシズムの準備期(145) 日本型ファシズムの活

動期(147) 日本型ファシズムの完成期(151)

C 急進ファシズム・イデオロギー

ファシズム・イデオロギーの出現(153) 権藤成卿の農本

主義的自治論(155) 安岡正篤の政治哲学(156) 大川周

明の〈日本精神〉文明論(158) 北一輝と二・二六事件

(159)

4 ファシズム体制下の思想的抵抗

A 組織的抵抗の最終的諸相

「唯物論研究会」の思想史的意義(165) 『世界文化』と

『土曜日』(168)

B ファシズム支配下の〈自由〉

〈自由〉主義の多義性(171) リベラリストの抵抗(172)

個人的抵抗の諸相(174)

140 140

144

153

165 165

171

II 国防国家の思想と大東亜共栄圏の問題

荒川 幾男

177

1 一九三〇年代の国民的経験

177

「国防国家体制」という呪術的な言葉(177) 状況的思想

としての「実務の思想」(179)

2 実務家の時代

180

一九三〇年代(180) 経営技術官僚の産業合理化運動(181)

軍事官僚の国家改造運動(183) テクノクラートの「国防

国家体制」の構想(185)

3 国防国家の思想構造

190

国家の領導性の転換と新しい統合(190) 指導原理として

の産業合理化(192) 行政サンジカリスムと日本ファシズ

ム(194) 安岡正篤の「日本精神」(196) 東亜新秩序と

「東亜協同体論」(201) 三木清と「東亜協同体論」の哲学

(211) 昭和研究会と「協同主義」の理念(213)

III 人民戦線の思想的問題

海原 峻

217

1 日本人民戦線——その成立の可能性

217

歴史的背景(217) 神山の人民戦線論(219) フランスの

構図と日本の構図(222) 特殊の普遍化(225) 文化的人

民戦線(227)

2 人民戦線——その起源の問題

230

統一戦線論延長上の人民戦線論(231)

ハリコフ会議(232)

ラップ解散(234)

革命作家芸術家協会(237)

社会ファ

シズム論の訂正とソ連の対仏外交——結論にかえて(238)

IV 十五年戦争下の思想と哲学

古田 光

241

——西田哲学を中心として——

1 はじめに——問題と視点

241

思想の「試練」としての十五年戦争(241)

近代日本の思

想的課題と西田哲学(243)

十五年戦争と哲学の動向(246)

2 昭和初頭の思想と哲学

248

第一次大戦後の思想的状況(248)

「西田哲学」の成立(250)

マルクス主義の擡頭と京都学派(253)

3 抵抗の論理と転向の論理

258

ファシズムへの抵抗と転向(258)

新しい抵抗の動き(260)

西田哲学とマルクス主義(263)

「種の論理」と「歴史的

形成の論理」(266)

4 暗黒期における思想と哲学

269

戦争の哲学的基礎づけ——東亜新秩序論から世界新秩序論

へ(269)

「世界史の哲学」と「近代の超克」(273)

西

田哲学とその問題点(276)

第6部 戦後日本の思想的課題

目次

I 戦後思想の歴史的展開

古田 光

283 281

1 戦後思想の出発と「近代主義」の問題

283

敗戦直後の思想状況(283) 平和と民主主義への出発(285)

「主体性」と「近代主義」の問題(288) 情勢の変化と思想の動向(292)

2 冷戦——「平和」と「独立」の問題

294

講和問題と国論の分裂(294) 「独立」と「民族」の問題

をめぐって(295) 「平和」と「人類」の問題をめぐって

(298) 「平和共存」への歩みと「現代」の意識(300)

3 「工業化」の進展と「大衆社会」の問題

304

一九五五年以後——「復興」から「高度成長」へ(304)

「工業化」と「大衆化」の進展(306) 大衆社会論とマル

クス主義(308) 日本社会論と日本文化論(312)

4 一九六〇年代——動向と課題

317

六〇年代の世界と日本(317) 「近代化」論と「経済的ナ

ショナリズム」(320) 「革新思想」の分裂と相剋(322)

II 戦後状況への思想的対応

1 保守思想の観念構造

327

荒瀬 豊

327

III

共同態と主体性

1 共同態に対する批判

- 「封建遺制」の克服(379) 共同態の概念(380) マルク
ス主義と「近代主義」(381) 「個」の認識(382) 同心
円思想とその成立要件(383) その成立要件の検討(385)

379

作田啓一

379

2 自由主義の転生

- 戦後保守思想の特性(327) 小泉信三のマルクス主義「批判」(329) 笠信太郎の「多元」のすすめ(331) 福田恆
存の科学への呪咀(332) 新装する保守思想(334)
戦後日本の自由主義(340) 吉野源三郎と『世界』の知識
人(342) 鶴見俊輔と『思想の科学』(347) 小田実と行
動する自由主義(352)

340

3 マルクス主義の展開

- 古在由重と戦後マルクス主義(355) 吉本隆明の既成マル
クス主義に対する内在的批判(358) 竹内芳郎と反戦の論
理(362)

355

4 根底を問う民主主義者

- ラディカル・デモクラットの思想特性(364) 羽仁五郎と
「人民」史学(365) むのたけじと『たいまつ』(370)
広津和郎と裁判批判(375)

364

2	国家と「家」の相剋とエゴイズムのめざめ(387)	
	主体的個人の準拠集団	
	主体性をめぐる二つの論点(390)	自己決定性か価値一貫性か(391)
	主体性の根拠としての階級と人類(393)	民
	族の歴史への包絡(395)	
3	主体性の民族的基礎	397
	共同態の体制維持機能と体制批判機能(397)	共同態への
	下降(399)	日本民族の二重構造(401)
	重の性格(403)	太平洋戦争の二
	結び(405)	
	社会思想史年表	
	事項索引	
	人名・著作索引	
	執筆者紹介	